

ぼぼねっと 第1回いのちの学校 ぼぼほのいえ 2014.6.4

よくわかる 「死生観と日本的スピリチュアルケア」

東北大学大学院文学研究科
実践宗教学寄附講座
准教授 谷山洋三

自己紹介

- 真宗大谷派僧侶、金沢市出身
- 長岡西病院(仏教のホスピス)で、心のケアを提供する僧侶「ビハーラ僧」として勤務
- 四天王寺大学の教員をしながら、関西の公立病院でスピリチュアルケアのボランティア
- 上智大学グリーンケア研究所でスピリチュアルケアの専門職養成
- 東北大学で、心のケアを提供する宗教者「臨床宗教師」を養成

1. 死生観

参考にしてください

神道の死生観

- 本居宣長(1730-1801): 人はすべて死ぬと黄泉の国に行く。黄泉の国は「きたなくあしき所」で、善人も悪人もかわりなく行く。人はこのことをやむを得ないこととして受け入れねばならない。
- 平田篤胤(1776-1843): 人は死ぬと、大国主神が主宰する「冥府(かみのみかど)」に行く。冥府はこの世と重なり合っているが、この世からは見ることができない。人は冥府で大国主神の裁判にかけられ、生前の行為の善悪に応じて賞または罰をもらう。冥府では衣食住その他この世と同じ生活を営む。

柳田國男の民俗学

- 死者の靈魂は、子孫の弔いを受けて祖霊、さらには神となる。
- 死後の靈魂は、この世の生前に過ごした場所の近くに留まる。
- 死者の靈魂・祖霊・神は、この世の人々との間に深い交流をなす。
- いまわの際の念願が死後に必ず達成される。
- 念願を達成するまで何度も子孫に生まれ変わる。

柳田國男『柳田國男全集13 先祖の話ほか』ちくま文庫

教理仏教の死生観

- A. 輪廻からの解放: 初期仏教、(最澄)、道元
- B. 浄土への往生: 法然、親鸞、日蓮
- C. 大宇宙との合一: 空海

◇ 文献学的研究によって明らかにされる「教理仏教」と、葬儀などの生活レベルで把握される「生活仏教」の二つの視点から仏教の死生観について紹介する

◇ (参考) 佐々木宏幹、〈ほとけ〉とカ 日本仏教文化の実像、吉川弘文館、2002。

生活仏教の死生観

- 生活仏教の死生観は、葬儀、年忌法要、そして仏壇における日々の礼拝や墓参りに現れる。その特徴は一言で言えば「祖先崇拜」ということになる
- 葬儀は死者の靈魂を鎮めてあの世に送る儀式
- 普段の仏壇でのお参りや墓参りにおいては、死者の靈魂との関わりが最も重要
- 位牌、遺骨、墓石には、その時々状況に応じて死者の靈魂が宿り、遺族は死者に話しかける。
- 三十三回忌もしくは五十回忌の法要を終えると、個であった死者の靈魂は、「ご先祖様」という集合体の一部となる。



キリスト教の死生観

- 「…神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」(ルカによる福音書17.20-21)
- [カトリック]
 - 死後は、天国・煉獄・地獄のどこかに行く。煉獄で小罪の償いを果たすと天国に入ることができる。
 - 第二バチカン公会議(1962-65)以降、「愛する人との再会への期待」と「死後の復活の希望」
- [プロテスタント]
 - 天国か地獄に行く。煉獄は説かれない。
 - カール・バルト(1886-1968)「恵み深く、人間のために味方される神が我々を待ち受けてくださる」

現代日本人の死生観

- ① 特定のイメージを伴った別の世界に行く(例:天国、浄土、極楽、地獄、黄泉、三途の川など)
- ② 超越的存在と合一する(例:神仏・宇宙と一体化する、永遠のいのちに溶け込む、祖霊になる)
- ③ 魂が肉体から分離する(さらに他の肉体に入る)(例:輪廻転生、生まれ変わる、中有など)
- ④ (普段の様態はさておき)特定の時期・機会にこの世に現れる(例:お盆、お迎えなど)
- ⑤ この世になんらかの形で留まる(例:草葉の陰で見守る、星になる)
- ⑥ 生きている人の記憶の中に留まる(例:作品を残す、歴史に名を残す)
- ⑦ 無になる(例:自己の消滅、遺体だけが残る)

2. 死について考える

あなたの死生観は？

準備しておきたいこと

- 財産、相続
- 感謝、謝罪、メッセージ
 - 自分の人生を振り返る
- 最期を迎える場所(第1～第3希望)
 - いくつかの可能性を考える
- 葬儀、遺骨
 - あらかじめ宗教家、葬儀社と相談を

死生観を「確立」or「確認」する？

- 死生観を「確立」するのは、至難の業
- まずは、「確認」を
- 確認しても、そのうち変化するかもしれない
- 矛盾しているかもしれない
- そもそも死生観は非合理的なもの

話し合ってみませんか

- 死は怖い？ 怖くない？
- 自分は死んだらどうなる？
- 亡くなったおじいちゃん／おばあちゃんは、どうなった？

3. スピリチュアルとは？

15

‘spiritual’ の訳語 (日本死の臨床研究会での議論の流れ)

- 70s後半～80s前半：「**宗教的**」
– 神父・牧師など宗教家の関与が求められた
- 80s後半～90s前半：「**宗教的**」「**靈的**」
– 日本的、仏教的視点に立つ発言の増加
- 90s中半以降：「**スピリチュアル**」
– ケアの担い手としての看護師の台頭

神谷綾子「第10章 スピリチュアルケアということ」
(カール・ベッカー編著『生と死のケアを考える』)

16

Not Religious, But Spiritual

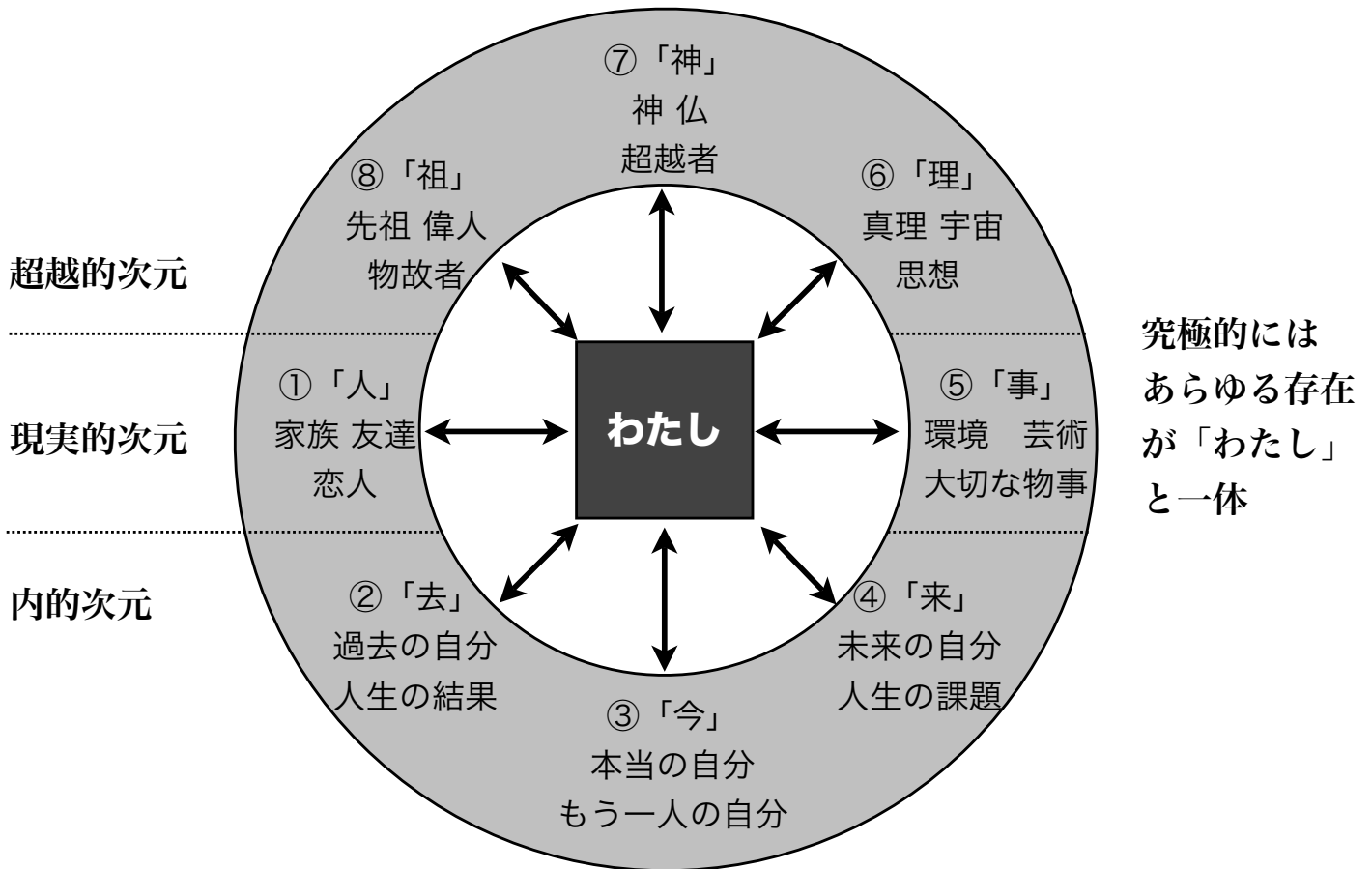
- 宗教的 (religious)
 - 特定の教団に所属している
 - 礼拝のために教会や寺院に行く
- スピリチュアル (spiritual)
 - 教会、寺院、神社の雰囲気が好き
 - 人間を超えた何かが存在するような気がする
 - 自分の内面を見つめるのが好き
 - 人生は修行だと思う

17

被災者の聞き書きから

- A 赤坂憲雄編、鎮魂と再生：東日本大震災・東北からの声100、藤原書店、2012
- 今まで当たり前だと考えていた「生きていること、命、時間」の意義や有り難さに気づいた
 - A1、A2
- 極限状態の中で、自分を越えた大いなるものとのつながりを感じるようになった
 - A3

スピリチュアルケアの構造図（谷山洋三、2007）



- ・中央の「わたし」は自意識
- ・「わたし」から外（①～⑧）に向かう矢印は、「求める」ことを意味する
- ・外（①～⑧）から「わたし」に向かう矢印は、「与えられる」ことを意味する

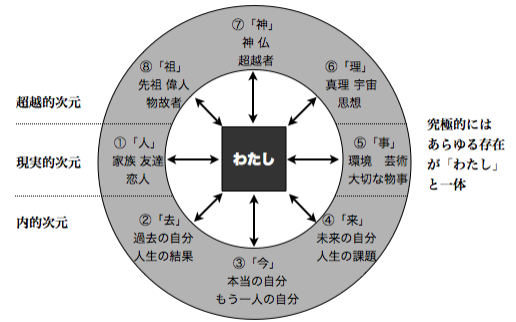
詳しくは、窪寺俊之・平林孝裕編著『続・スピリチュアルケアを語る 一医療・看護・介護・福祉への新しい視点』関西学院大学出版会、2009 所収の拙稿参照

4. スピリチュアルケアと宗教的ケア

まずは傾聴から
Not Doing, But Being

25

スピリチュアルケアの構造図(谷山洋三『仏教とスピリチュアルケア』2008)



26

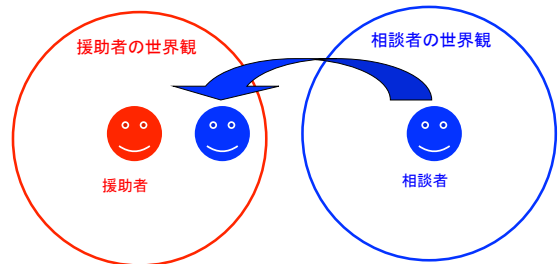
スピリチュアルケア 宗教的ケア

・自分の支えとなるものを再確認・再発見することで、生きる力を取り戻す援助もしくはセルフケア
・スピリチュアリティ(非合理的な体験・感覚に意味づけをする機能)によるケア

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 表現方法は自由 ・ ケア提供者(援助者)は、ケア対象者(相談者)の「気づき」を待つ ・ 助言をすることはあまりない | <ul style="list-style-type: none"> ・ 表現方法は宗教的 ・ ケア提供者(援助者)が「気づき」もしくは「答え」を提供する ・ 宗教的行為そのものがケアになる |
|---|--|

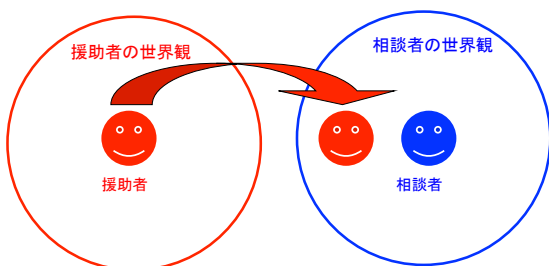
27

宗教的ケアにおける援助者と相談者の関係



谷山洋三「スピリチュアルケアをこう考えるースピリチュアルケアと宗教的ケア」(緩和ケア、19-1) ²⁸

スピリチュアルケアにおける援助者と相談者の関係



谷山洋三「スピリチュアルケアをこう考えるースピリチュアルケアと宗教的ケア」(緩和ケア、19-1) ²⁹

5. 臨床宗教師

日本版チャプレン

Chaplainの邦訳として

- 従来chaplainは、「施設付き宗教者」「チャプレン」と訳されてきた
- 仏教では「ビハーラ僧」(=仏教チャプレン)
- 「チャプレン」では、活動内容が分からない
- 在宅緩和ケアクリニックでチャプレンを雇用している岡部健医師の発案による、「臨床宗教師」という新たな邦訳を使用することに

提唱者・岡部医師の思い

- 緩和医療、在宅ケア
- 「お迎え」の研究
- 自身のがん発症
- 看護師の死と宗教的ケア(お経の力)
- 被災地の幽霊譚
- 「死に至る道しるべ」が必要
- 日本的チャプレンとして「臨床宗教師」を！

奥野修司『看取り先生の遺言』文藝春秋、2013

臨床宗教師のモデル

欧米のチャプレン

医療(ホスピスだけではない)・福祉・教育・軍隊・警察・消防・刑務所・企業など

×

日本の風土、宗教的土壌

現代日本の宗教と社会との関係

↓

臨床宗教師

臨床宗教師の特徴

- 主として所属教団の信徒以外を対象として
- 宗教協力を前提にして
- **布教伝道を目的とせずに**
- 公共空間において
- 公的機関と連携しながら
- スピリチュアルケアと宗教的ケアを提供する
- 宗教者

臨床宗教師の可能性

- スピリチュアル／宗教的ニーズの表出を助ける
- スピリチュアルケアと宗教的ケア
 - 民間信仰的価値観を受容する
 - 宗教的資源の活用(祈り、読経、祭具の提供など)
 - 必要があれば他の宗教者を紹介する
- グリーフケア
 - 死別後の継続的な関与
- 葬儀や墓など儀礼に関わる情報提供
- スタッフのケア